様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月　 ７ 日現在

機関番号：３２６１２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０２５４４

研究課題名（和文）シュルレアリスムの受容と発信：瀧口修造による共同制作の実践

研究課題名（英文）Reception and transmission of surrealism : collaborative production by Shuzo Takiguchi

研究代表者
笠井　裕之（KASAI, Hiroyuki）

慶應義塾大学・法学部（日吉）・教授

研究者番号：１０２６５９４４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：戦時下の思想統制の激化とともに日本のシュルレアリスムは途絶したとの見方がある。本研究メンバーは、瀧口修造による戦前のシュルレアリスム運動と、戦後の国境とジャンルを越える共同制作の実践とを「共同性」の観点から捉え直し、日本のシュルレアリスムを戦前と戦後を一貫する運動として跡づけることを試みた。特に瀧口とジュアン・ミロの共同作業に関する資料の実証的研究を通じ、両者の往復書簡資料集を刊行するための作業を行なった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
（1）瀧口のように「作品」「完成」の概念に根本的な疑義を呈した作家の場合、未完の草稿、メモなどの断片がいかに制作に関与したかに本質的な意味がある。一次資料の調査から出発し、作品の生成過程に密着する本研究は、文学史・美術史の影に隠れた創造の機微に光をあてるものである。
（2）瀧口の戦前と戦後の活動を一貫した視座で捉え直した本研究は、従来、戦争によって断絶したと解されてきた日本のシュルレアリスム史に新たな見解を開くものとなるだろう。
（3）現在刊行準備中の瀧口とミロの往復書簡資料集は、二冊の詩画集の制作過程を双方向から実証し、共同作業の現場を浮き彫りにするもので、高い資料的価値を有すると考えられる。

研究成果の概要（英文）：It is generally considered that the Surrealism in Japan was disrupted due to strict thought control in wartime. However, we reexamined Shuzo Takiguchi’s surrealistic activities before and after World War II from a viewpoint of "collective imagination" and recaptured his post war collaborative activities beyond borders and genres as a consistent development of his prewar surrealism. Specifically, we made preparation for publishing of a correspondence between Takiguchi and Joan Miro, through factual research of their collaboration.

研究分野：20世紀フランス文学

キーワード：瀧口修造　ジュアン・ミロ　シュルレアリスム　山中散生

１．研究開始当初の背景

シュルレアリスムに代表される 20 世紀前衛芸術は、国籍や言語の違いを横断し、既成のジャンルを越境するだけでなく、個人的な作品制作から複数の作者による共同制作へと向かう傾向を顕著に示す。シュルレアリスムの受容と発信において主導的な役割を果たした瀧口修造は、戦前からフランスのシュルレアリストと交流し、1935 年には *Cahiers d'art* 誌に日本のシュルレアリスムと検閲の実態を報告、また 1937 年には山中散生と「海外超現実主義作品展」を企画したが、これらはまさに 1930 年代のシュルレアリスム国際化の動きに呼応するものでもあった。戦後、タケミヤ画廊や「実験工房」に拠る芸術家たちと行動を共にしたことも、瀧口が「共同性」に重きをおいていたことの証左といえるだろう。さらに 1960 年代以降は実作者として文字通り共同制作を活動の中心に据えるようになり、マルセル・デュシャンとの交流から生まれた『マルセル・デュシャン語録』(1968) をはじめ、詩画集としてジュアン・ミロと『手づくり諺』(1970) 、『ミロの星とともに』(1978) 、またアントニ・タピエスと『物質のまなざし』(1975) の制作に力を注いだことは、同時代の芸術家が共有した「集団的想像力」を把握する上でも注目に価する。

瀧口のこの「変化」に着目し、1958 年の渡欧にその契機を探る指摘は従来も行われてきた。しかし国内外の一次資料に基づき個々の作品の生成過程を実証する研究は、本研究メンバーによるもの以外は発表されていない。また瀧口の戦前戦後を通じた活動を前衛芸術史の流れから検証することも行われていない。思想統制が激化した 1941 年、瀧口は特高に検挙され、戦中は保護観察下に置かれた。日本のシュルレアリスム運動も戦時下の弾圧により途絶したとの見方が支配的である。

２．研究の目的

瀧口を共同制作に駆り立てたものは、実は戦前の活動と通底していたのではないか、戦後の瀧口は共同制作をより徹底した形で、つまり実作者として理論を実践へと導くことで具体化し、過去のシュルレアリスムを乗り越えようとしたのではないか。このような問題意識から、本研究は戦前の瀧口とシュルレアリスム運動に遡り、それを戦後に接続する視点に立っている。

1958 年の渡欧は瀧口にとって過去を未来に接続する契機となった。ついにブルトンとの面会を果たしただけでなく、デュシャンとの邂逅はその後の言語とオブジェをめぐる考察の源泉となる。ミロとの交流に関しては、1940 年に瀧口が世界初のミロの研究書を刊行した事実からも瀧口の戦前と戦後を繋ぐ要諦といえる。さらにダリやタピエスも含め、フランコ独裁下に生きたカタルーニャの作家との交流が、瀧口を芸術と「アクチュアリテ」が交差する場に導いたと指摘することもできるだろう。

本研究の目的は、瀧口が戦後に共同制作を軸として行った前衛芸術運動の基層に戦前のシュルレアリスムの蓄積を確認し、瀧口が受容しかつ発信につとめたシュルレアリスムの一貫性と新たな展開を「共同性」を鍵として解明することにある。

３．研究の方法

瀧口が関わった共同制作、あるいは広義の「コラボレーション」の着想、生成、完成あるいは挫折にいたる過程を多面的・有機的に捉えるために、「作品」の完成と未完成を平等に対象とし、断片的な資料群から完成作品へといたる生成過程、あるいは未完に終わるプロジェクトの放棄への過程を実証的に再構成することにつとめた。主な作業内容は以下の通りである。

(1) 本研究メンバー全員による研究会を定期的に開催し（各年度に約 10 回)、資料の読解と分析を行った。

(2) 国内外の所蔵機関を訪問し、資料の収集と情報共有のための環境構築につとめた。国内では、慶應義塾大学アート・センター「瀧口修造アーカイヴ」、慶應義塾大学日吉メディアセンター「山中散生コレクション」、多摩美術大学アートテーク・アーカイヴセンター「瀧口修造文庫」、富山県美術館「瀧口修造コレクション」など。国外では、サン＝ドニ 美術歴史博物館「ポール・エリュアール・コレクション」（フランス)、ジュアン・ミロ財団、スクセシオ・ジュアン・ミロ、ジュアン・ジュレンス・アルティガス財団、アントニ・タピエス財団、ダリ劇場美術館（以上スペイン）など。

(3) 神奈川県立近代美術館で開催された資料展「1937：モダニズムの分岐点」(2017 年 9 月～11 月）に協力し、『山中散生書簡資料集』を作成した。

(4) 瀧口とミロの共同制作の詳細を証し立てる往復書簡資料集の刊行に向け、その編集と執筆を行った。本研究の成果発表となるこの作業は現在も継続中であり、2020 年に慶應義塾大学出版会から刊行予定である。

４．研究成果

本研究メンバーが個別に発表した論文等に加えて、上述の『山中散生書簡資料集』(2017)、そして瀧口とミロの往復書簡資料集（2020 年刊行予定）が本研究の主要な成果となる。

瀧口は戦災でフランスのシュルレアリストから受け取った書簡を含む資料一切を失ったため、瀧口の遺品資料から戦前のシュルレアリスムについて実証的な検証を行うには限界がある。それだけに慶應義塾大学日吉メディアセンターが所蔵する「山中散生コレクション」の資料価値はきわめて高い。山中は瀧口と並んで戦前の日本でシュルレアリスムを牽引した人物であり、とりわけ 1937 年に両者が協力して企画した「海外超現実主義作品展」に際してヨーロッパのシュルレアリストと交わした数多くの書簡は、瀧口資料の欠落を埋め、戦前の日本におけるシュルレアリスムの受容と発信の事実を詳細に物語る資料である。この「山中散生コレクション」は、国外は言うに及ばず、国内でもその存在がよく知られているとは言いがたい。今後、『山中散生書簡資料集』は瀧口と山中に関する研究のみならず、1930 年代におけるシュルレアリスムの国際的展開の文脈においても、重要な基礎的文献となるはずである。

瀧口とミロの往復書簡資料集に関しては、本研究の遂行において若干の軌道修正があったことを述べておかねばならない。当初、本研究メンバーは、瀧口が共同制作の相手としたデュシャン、ミロ、タピエスの 3 名と交わした書簡を集成した資料集を構想していた。しかし 2012 年に逝去したタピエスの遺品の整理がスペイン本国でいまだ充分に進んでおらず、閲覧できる資料が限られていること、また瀧口とデュシャンの書簡に関しては、本研究メンバー（笠井、朝木）を含む編者によってすでに発表されていること（「瀧口修造=マルセル・デュシャン書簡資料集」,「瀧口修造とマルセル・デュシャン」展図録，千葉市美術館，2011 年)、そして瀧口とミロの書簡は日本とスペインに数多く保存されており、そのすべてが未発表であること――以上を勘案した結果、本研究の成果発表として、瀧口とミロの往復書簡集の刊行を優先することとした。

瀧口は戦前の 1940 年に世界初のミロのモノグラフィを刊行している。つまり両者の関係は戦前と戦後にまたがり、瀧口の戦前と戦後を接続して考察しようとする本研究のテーマに合致している。しかもその書簡に表出された真に創造的な交流の記録は、二冊の詩画集の成立過程を証し立てるとともに、瀧口とミロ、それぞれの芸術家としての本質を解き明かす鍵となることだろう。書簡はフランス語で書かれているが、この往復書簡集は日本語訳とオリジナルのフランス語とのバイリンガルの書物として編集されている。国外の多くの研究者にとっても有益な資料となることを期待している。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 13 件）

① 朝吹 亮二、特集の終わりに　現代詩の明日へ　ポール・クローデル生誕一五〇年、三田文学、査読無、98 巻 136 号、2019、pp. 126-126

② 朝木 由香、貝をつなぐ、「国立民族学博物館コレクション　貝の道」展図録、査読無、2018、pp. 8-8

③ 朝木 由香、上田薫　展覧会歴・主要文献、上田薫画集、査読無、2018、pp. 144-147

④ Hiroyuki KASAI、Cocteau et la littérature japonaise classique. Au sujet de sa lecture du *Dit du Genji* et de contes de Saikaku、Cahiers Jean Cocteau 16 : Jean Cocteau et l'Orient、査読有、16 巻、2018、pp. 137-149

⑤ 笠井 裕之、西脇順三郎と瀧口修造：それぞれのシュルレアリスムをめぐって、三色旗、査読無、816 号、2018、pp. 3-9

⑥ 笠井 裕之、アラン・ジュフロワの最後の／最初の言葉、教養論叢、査読無、139 号、2018、pp. 93-105

⑦ 笠井 裕之、『日曜日の散歩者』によせて、三田文学、査読無、96 巻 131 号、2017、pp. 244-252

⑧ 朝木 由香、「海外超現実主義作品展」をめぐる海外との交流：山中散生と瀧口修造の書簡について、１９３７：モダニズムの分岐点」展パンフレット、査読無、2017、pp.2-5

⑨ 朝木 由香、鏡だけが知っている色彩の秘密：加納光於「揺らめく色の穂先に」に寄せて、「加納光於：揺らめく色の穂先に」展図録、査読無、2017、pp. 6-7

⑩ 朝吹 亮二、塚原 史、ツァラの〈無意味〉、ブルトンの〈驚異〉、現代詩手帖、査読無、60 巻 3 号、2017、pp. 10-21

⑪ 朝木 由香、上田薫の「反映の宇宙」主要文献 年譜、「反映の宇宙 特集：上田薫」展図録、査読無、2017、pp. 4-6, I-II

⑫ 朝木 由香、松本竣介作品解説、「松本竣介　創造の原点」展図録、査読無、2016、pp. 14, 21, 49, 54

⑬ 笠井 裕之、ジャン・コクトー『地獄の機械』の生成論的研究に向けて：エディション・クリティック の試み(2)、慶應義塾大学日吉紀要フランス語フランス文学、査読無、63 号、2016、pp. 75-154

〔学会発表〕（計 10 件）

① 朝吹 亮二、西脇順三郎から六〇年代詩人へ：三田の現代詩について、三田文学第 3 回読書会、招待講演、2019

② 笠井 裕之、映画『日曜日の散歩者』解説、三田文学スペシャルイベント「時が超える青春：詩が結ぶ台湾と三田」、招待講演、2018

③ 笠井 裕之、センチメンタルな金時計、アムバルワリア祭 VIII、招待講演、2018

④ 松田 健児、カタルーニャ，ミロ，日本、長崎県美術館、招待講演、2018

⑤ David GULLENTOPS、Hiroyuki KASAI、Présentation des *Cahiers Jean Cocteau 16 : Jean Cocteau et l'Orient*、Les Amis de Jean Cocteau (France)、招待講演、2018

⑥ 笠井 裕之、瀧口修造＋加納光於《稲妻捕り Elements》から 1958 年のブリュッセル，ブリュージュへ、慶應義塾大学アート・センター 西脇順三郎研究会、2017

⑦ Kenji MATSUDA、Ricard BRU、Identitats llunyanes. Diàlegs, influències i confluències entre Pablo Picasso i l'art japonès、Picasso i identitat (COAC)、招待講演、2017

⑧ 松田 健児、ピカソとスペイン（美術）：ベラスケスを軸に、国際シンポジウム「ピカソと人類の美術」、招待講演、2017

⑨ 松田 健児、バルセロナにおけるピカソ作品の流通と蒐集、スペイン・ラテンアメリカ美術史研究会第 3 回研究会、2017

⑩松田 健児、20 世紀初頭の日本におけるスペイン的なもの、あるいはスペイン美術の受容、第 18 回国際会議:対立するイメージ :19 世紀と 20 世紀におけ るスペイン的なもの（スペイン）。2016

〔図書〕（計 6 件）

① 大高 保二郎、久米 順子、松原 典子、豊田 唯、松田 健児、NHK ブックス、スペイン美術史入門、2018、400 (pp. 305-379)

② David GULLENTOPS、Hiroyuki KASAI 共編、Non Lieu (France)、Cahiers Jean Cocteau 16 : Jean Cocteau et l'Orient、2018、236

③ 田中 淳一、朝吹 亮二、笠井 裕之、松田 健児、朝木 由香 共編著、神奈川県立近代美術館、山中散生書簡資料集、2017、22

④ 木下 亮、松田 健児 他、竹林舎、バルセロナ　カタルーニャ文化の再生と展開、2017、456 (pp. 278-302)

⑤ Kenji MATSUDA 他、Universitat Autònoma de Barcelona (Spain)、Agents del mercat artístic i col·leccionistes、2017、244 (pp. 57-81)

⑥ Kenji MATSUDA 他、CSIC (Spain)、Imaginarios en conflicto: Lo español en los siglos XIX y XX、2016、513 (pp. 97-115)

６．研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：朝吹 亮二

ローマ字氏名：ASABUKI, Ryoji

所属研究機関名：慶應義塾大学

部局名：法学部

職名：名誉教授

研究者番号（8 桁）：70159383

研究分担者氏名：松田 健児
ローマ字氏名：MATSUDA, Kenji
所属研究機関名：慶應義塾大学
部局名：商学部
職名：准教授
研究者番号（8 桁）：70548255

研究分担者氏名：朝木 由香
ローマ字氏名：ASAKI, Yuka
所属研究機関名：神奈川県立近代美術館
部局名：企画課
職名：学芸員
研究者番号（8 桁）：50450797

(2)研究協力者
研究協力者氏名：田中 淳一
ローマ字氏名：TANAKA, Junichi
研究協力者氏名：森山 緑
ローマ字氏名：MORIYAMA, Midori
研究協力者氏名：山腰 亮介
ローマ字氏名：YAMAKOSHI, Ryosuke

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。